



徳島県立総合高等学校広報紙

# まなびーあ徳島便り

第10号  
編集・発行  
徳島県立  
総合高等学校

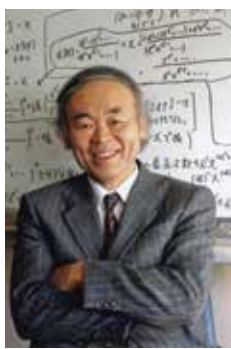
## 藤原正彦さん 父との思い出を語る

開校7周年記念本部主催講座

### 父新田次郎さんの絶筆「孤愁」を書き継ぎ完成

平成27年7月5日(日)徳島県立総合教育センター(板野町)で、お茶の水女子大学名誉教授・作家の藤原正彦さんによる「新田次郎、私そしてモラエス」と題しての記念講演がありました。

ポルトガルの文人モラエスを描いた小説「孤愁 サウダー」を父新田次郎さんと親子2代で完成させた藤原さんは、父の思い出、「孤愁」完成までのエピソードを語りました。(参加者289名)



### 父母への「孤愁 サウダー」

父は中央気象台(現気象庁)に勤務していて、昭和7年から13年まで富士山測候所にいました。この経験が山岳小説を書く基礎となりました。

昭和14年に母と結婚し、昭和18年5月満洲に赴任、同年7月に私が誕生しました。昭和20年8月9日0時、日ソ不可侵条約を破ってソ連軍が侵攻し生活は一変。父は母に生後1カ月の妹、私、5歳の兄を連れて逃げるよう指示しました。母は父と一緒に泣いて泣いて懇願しましたが、父の武士道精神が許さず、私たちは昭和21年9月に帰国しました。収容所に入れられた父は1カ月遅れの10月に帰国することができたのですが、電気製品の修理が出来たので特別待遇を受け、逃走を手伝ってくれた人がいたようでした。収容所で何があったか、生涯口にすることはありませんでした。同年11月に父は気象台に復職しました。

昭和23年、母は遺書として、流れる星は生きている」を執筆、ベストセラーとなり映画化されました。母は労苦から心臓を患い、私は三輪車遊びで怪我をして手術をうけました。母の薬代、私の手術代が必要となり、父が執筆を始めました。最初は売れませんでした。昭和31年「強力伝」で第34回直木賞を受賞しました。気象台勤務と執筆の二足のわらじでは短編しか書くことができず、長編物を書きたいの思いから、迷いはありましたが、母の強力な後押しもあり、昭和41年に気象台を退職し、執筆活動に専念することにしました。



### 新田次郎の「孤愁 サウダー」

「孤愁」は、昭和54年8月から毎日新聞の朝刊に連載されましたが、父がモラエスを知ったのは富士山測候所勤務時代の昭和10、11年頃で、日本語に訳された「徳島の盆踊り」「おヨネと小春」を読んだのがきっかけでした。ベストセラー作家になってから後に「定本モラエス全集」を読み、一層感激が高まって小説の対象として具現化したいと思うようになり、ポルトガル、マカオ、長崎、神戸、大阪、徳島と何度も取材に出かけました。「孤愁」に掛ける思いは並々ならぬものがあつたのです。

### 藤原正彦の「孤愁 サウダー」

昭和55年2月15日の寒い朝、父は突然の心筋梗塞で倒れ、私の腕の中で息を引き取りました。私は悲しくありませんでした。怒りに震えていたのです。連載が始まり1年足らずで暴力的に中断させられた父の無念を思い、冷酷な自然の摂理に怒り、その不条理に憤りました。おそらく父が亡くなった翌日だったと思います。父の作品を、父が書いたであろうように完成することで父の無念を晴らすと決意しました。「若き数学者のアメリカ」1作を書いただけの一介の数学者である私が、憤怒の中でそんな無謀な決意をし、父の霊前に誓ったのです。

以来32年間、父の取材先はすべて訪れ、父の読んだ文献はすべて読みました。そして1年半ほどかけて書き上げましたが、確かに難しい仕事でした。今頭に浮かぶのは、「父の無念をやつと晴らした」という想い、そして「父の珠玉の作品を凡庸な筆で汚したかもしれない」という危惧です。一つだけ確かなことは、父との約束を32年間かけて果たした安堵感であり、それが父への供養になると思っています。

### とくしま学博士による論文発表

藤原正彦さんの講演に先立ち、とくしま学博士の郡利明さんによる、徳島県民と阿波人形浄瑠璃」と題する論文発表がありました。







